

台風のとバツチリ

中村アキヤ

夜半から物凄い量の雨が断続していた。朝方になって雨脚はやや落ちたものの雲行きは更に怪しく激しかった。

「大型で特に勢力の強い台風十五号は、伊豆諸島の二五〇キロメートルの海上にあつて、中心気圧は九六〇ミリバール、半径二五〇キロメートルは風速二十五メートル以上の暴風雨になり、本日未明には八丈島を暴風雨圏に巻き込み更に発達しながら北上中でありませう。このまま進むと明夜半には静岡と房総半島を結ぶ線上に上陸の恐れがあります。このため関東、東海地方の上空は厚い雨雲に覆われており、これから台風の接近に伴い激しい風雨に見舞われる恐れがあり、気象庁は嚴重な警戒を呼び掛けております。すでに昨夜来の雨で房総地方には一時間に八十ミリを超す降雨があり、京成電鉄は朝から運転を中止しております。また、羽田と伊豆諸島を結ぶ空の便も相次いで欠航になっております。これからお出かけになる方は今後の気象情報に十分ご注意ください」

起き抜けにテレビがこう告げていた。今年の夏はお盆の頃までは例年になく過ごしやすかったのだが、その後はエルニーニョの影響が非常に優勢な太平洋高気圧がドツカリと居座り、八月の終わりから猛烈な残暑を日本列島にもたらしていた。

ところが十日ほど前からマリアナ沖に発生した台風十五号は、九月に入っても進路上にある予想以上に安定かつ強力な高気圧のために、直接本土には影響すまいという事前の予想を裏切つて今や日本の中心部を伺う姿勢を示していた。

「京成電鉄が止まったのなら今日は少し早めに家を出ようか、箱崎で混むかも知れないから」

Nは朝食を摂りながら呟いた。今回の出張はシカゴ、ニューヨーク各一泊、メンフィス、サンフランシスコ各二泊、往復の機中泊を入れても丁度一週間の比較的短い旅行で、季節的にも着替えも少なくて済み、小型のトランクとスーツハンガーを両手にぶら下げて行くといった気軽なものであった。訪問先も知っているところばかりで烈しいネゴの予定もなく、準備と云えばダイナーの際に決まって聞かれるであろうソ連の政変に対する感想とか北方領土の問題などについて新聞を少し細かく読んだ程度だった。

Nの唯一の気がかりはこの台風の接近により今日の十七時二十五分発のU A 882便が欠航になることであつた。

予定通りコトが運べば、時差の関係もあつて同じ日付の午後三時にはシカゴ着、翌日の午前中にS社を訪問し午後便でニューヨークに移動し、夜はかつての部下で今は米国で語学留学中のT君と会い、一緒にミュージカルでも見ようとチケットも手配済みであつた。

「もし欠航になったらこの第一日、二日目の予定はキャンセルしてメンフィスに直行するしかない。それにしても今日は日曜なので先方のオフィスに電話しても連絡はつかない。折角入手したミュージカルのチケットを無駄にしたくないな」

Nは口には出さないが、万一の場合の対応策を心の中で準備する必要はあつた。

通常のペースならば成田発五時二十五分の便であれば四時に成田空港に着いていれば十分で箱崎でのチェックインと成田までのリムジン七十分かかることを見越して、二時半までに箱崎に着けばよかつた。最近開通した成田エクスプレスは、車両もスマート、乗り心地も満点で、バスと違って時間が正確、と全ての点での優れものであるが、新宿からは一時間に一本しか出ないうえ、車両連結数も少なく余程前に予約しなければ乗るチャンスはなかつた。

Nは時間的に余裕を見て午後一前に家を出た。雨に祟られた日曜日に暇を帯て余した長男が車をだしてくれることになつた。台風特有の大粒の雨がぱらついたが道路はがら空きで一時半に箱崎に到着した。

「こんなに空いているなら成田まで行つてあげようか？」
と息子はドライブしたそうな顔つきである。

「この車は雨には滅法強いよ。スタッドレスタイヤ装着だから」
この言葉にNはちよつと食指が動いたが、

「成田方面は雨がすごいついていうし、送ってもらつても却つて君の帰り道が心配だから此処までいいよ。じゃあね。サンキュー」といつて息子をかせした。

あいつには、土産にTシャツでも買ってやろう。

ターミナルビル一階の航空会社のカウンターロビーは通常の混みようで、静

かな雰囲気の中にも大きな荷物を抱えている人、見送りの人、仲間を待っている人など、旅立ち前の期待と興奮で活力に満ちていた。UA（ユナイテッド・エアライン）のカウンターで

「この台風で今日は飛びますか？」と聞くと美人のカウンター嬢が、
「はい、オンタイムです。チェックインする荷物はありませんね、お元気でいってらっしゃいませ」とニコヤカに送ってくれる。こちらも思わずニッコリする。ここまでは全て順調であった。（so far）ここまでは！

箱崎から成田までは五十分間隔でリムジンバスが走り、なかにはトイレは勿論、電話もOKという二輜連結のバスもある。いつものことながら出国手続きを終えてバスに乗り込むといよいよ外国に行くのだという思いが一入募ってくるものだ。Nはリムジンの切符を買うためにエスカレーターで二階にあがった。

ところがそこは落ち着いた一階の雰囲気とはガラリと変わって想像もできないような無秩序と喧騒、不安と混乱の世界が展開されていた。普段は二か所あるチケットカウンターが五か所に増設されていたが、どの窓口も長蛇の列。重い荷物を持った外人、子供の手を引いているおばさん、何やら相談している老夫婦、電話をしている人、時間表をチェックしている人、いずれも緊張し、憔悴した顔つきの人達のオンパレードだ。台風の接近で京成電鉄のスカイライナーが早々に運休したが、どうやらJR成田線も危なくなつたとみえ、京浜地帯からの乗客はみんなこのリムジンバスにスイッチしたかに思えた。通常なら十五分も待てばバスに乗り込めるのに、今日は切符を買うのに三十分も四十分も並ばなければなかった。

たまりかねた一部の客がタクシীর相乗りを呼び掛ける。

「一人当たり四、五千円ですよ！ いかがですか？」

時間に追われている人がバラバラと集まる。OLらしいグループがどうしようとき計をみながら相談している。

「もう一人、タクシীরを使う方居りませんか？」

ターミナルの職員が大声で斡旋している。外人同志で事態の確認をしあっている。言葉が十分通じないので対処の方法が判らないのだ。一階でチェックインしたばかりのおばさんが息咳き切ってカウンターに駆け込んできた。長時間

並んでいる大勢の人達を無視して、

「済みません、時間がありません。すぐにバスに乗せてください！」

Nはこんなに混むのなら息子の車で直接成田に行った方がよかつたかなとも思ったが、それは後の祭り。しかしようやく二時五十分発のバスのチケットを買うことができた。

結局、箱崎に一時間以上もいたことになるが、バスにさえ乗ることができれば、七十分後には、いや遅くとも九十分後の四時半には確実に成田に着ける。飛行機は五時二十五分発だから、何とかなりそうだ。早めに家を出てよかつたなどNは内心ひそかに安堵した。

バスは高速道路を成田インターまでは順調に走行した。心地よいエンジン音と程よい振動に先ほどまでの緊張が解けたのか、鼾をかいて寝ている人がいる。一時間ほど走って成田インターの手前から道路が込みはじめた。車間距離が詰まってくると遠方に先発のリムジンが見えた。

瞳を凝らしてよく見ると前方のリムジンは全部で七、八台も数えられる。バスは五分おきに出ているので、八台みえるということは三〜四十分前のバスがまだインターを通過できずにウロウロしていることになる。

「でもインターを抜ければ空港までは十五分程度で着く筈。ノロノロでもバスが動いていれば心配はあるまい」とNは未だ樂觀していた。歩調を合わせるように後席の鼾はますます快調に轟音を発している。

成田インターが見えてきた。インターの出口は二つあって、片方は成田市内への一般道路へ、他方はそのまま成田空港へとつながっている。道路の混雑ぶりはかなり酷くなり、バスが停車する頻度が増え、動いている時間と停止している時間が同じくらいの頻度になってきた。バスの発進と停止の繰り返しに、さしも快調子を誇っていた大鼾もエンスト気味になり、ついにガクンと急停止したきり音声は途絶え、以後不気味な沈黙がバスの中に充満した。リムジンの運転者同士がしきりに無線で交信している。

「この先の道路で土砂崩れがあつて車が渋滞しているそうです。ここから空港まで三十分ぐらいかかりそうです」

運転者の報告にみんな一斉に時計を見る。各自の飛行機の出発時間をチェックする。大丈夫と頷く人、ため息をつく人、また眠る人。

成田インターを通過すると『空港まであと5km』の表示板、次いで正面に全日空ホテルの高層ビルが見えてくる。普通なら一分もしないうちに左手にSASの修理工場があり、立体交差を過ぎるとホリデイインが遠望でき、貨物自動車の入り口、続いて旅行者の手荷物検査所へとバスは進む筈である。

もうすぐ四時半、Nの乗る便には、あと一時間しかない。

「でも空港までの距離はあと二キロぐらいなもの、バスが普通に走れば二、三分で着く距離だ。焦っても仕方ない、静かに待とう。それにしても息子の車で来なくて本当に良かった。

狭い車の中で親子でイライラしているうちに、捌け口のない焦燥感から最後には喧嘩になってしまいかもしれない」とNは思った。

道路の混雑は益々激しさを増し、絶望的な事態になってきた。路肩の部分にも車が入り込み、二車線の道路に三列の車が文字通り数珠つなぎ。タクシーもハイヤーもリムジンもオートバイも路線変更はできず、追い越しもできず、ましてや引き返すことなど考えも及ばない。

ただひたすら前の車の後塵を拝しながら車間距離をビツチリと詰め、思い出したようにやってくる激しい雨にワイパーを二、三回作動させるのが唯一の許された行為である。

「こんなにヤキモキさせてリムジン代に二千五百円はいかにも高い。これはリムジンではなくて理不尽だ」

こんな時でもくだらない駄洒落が我ながらよく出るものだと、Nは苦笑いした。

暫くしたら車間距離を詰め、ワイパーを動かす、また暫くしてから車間距離を詰めワイパーを動かす。また暫くして……。もう軀は聞こえず聞こえるのはため息ばかりになった。

時間は容赦なく確実に過ぎてゆく。ここまで来て飛行機に間に合わなかったらと思うと、段々イライラしてくる。身体中の筋肉が硬ばり、腕組みしている手に思わず力が入ってくる。手の平が汗ばんでくる。目が充血してくる……。リムジンの乗客はみんな同じ状態にあった。

そういえば五年程前、Nは似たような経験をしたことがあった。久しぶりに高校時代の友人Kとニューヨークで再会し帰国前夜に痛飲した際、翌日の土曜

日に彼の会社の車を借り出してマンハッタンを探検し、その足でケネディ空港まで送って貰うことになった。K自身もゆっくりマンハッタンを見物したことはなく、その機会をねらっていたとのこと。土曜日の午前ということもあって自由の女神からセントラルパーク、ハーレムの黒人街まで細かく見学したところまでは順調だった。(so far)この時も！

ケネディ空港はマンハッタンから直線距離にしてほんの十マイル、タクシーを飛ばしても交通事情が良ければ三十分、チップ込みで三十ドルもあれば悠々と辿りつける。この点成田とは違ってとても便利な位置にある。地図でいえばFDR(フランクリン・ルーズベルト・ドライブという道路)からイーストリバーの下を通るクイーンズ・ミッドタウン・トンネルを抜けて国道495線に入り、グランドセントラル・ジャンクションで右折して国道678号線に乗ればケネディ空港に入り込める筈であった。

Nがナビゲーターをやり、Kが運転する。495線に乗り入れるまではいとも簡単で「地図さえあれば何処に行くのも意のままだね」なんてほくそ笑んだのも束の間、次に曲がるべきジャンクションをミスってしまったのだ。地図には、なんとかアベニューとか、かんとかハイウェイの記載がやたらある上、地図上の細かい横文字はまことに読み辛い。

しかもこの道路標識は、曲がる方向は左右ではなく東西南北で示してあるのだ。だから、今どちらの方向を指して走っているのかを確認する前に、がカーブしてしまい、地図を逆さにして調べているうちに、また次のジャンクションに来てしまう有様。

やっと現在地を把握してここを曲がれといったときには高スピードのためタイミングが遅れ、無理に曲がろうとすればその度に後ろでギーツという急ブレーキの音、責め立てるようなクラクションの連続攻撃に遭う。

道を外す度にもとの国道に戻るのが一苦勞で、飛行機の出発時刻は刻一刻と迫り、Nはまさに身のすくむ思いで「こんな運動神経の鈍い奴の車には金輪際乗るもんか」と心中思ったことがある。

今や五年前のそれと同じ状況で、Nは何にでもすがりつきたい精神状態に立ち到った。宇宙の輪廻、歴史は繰り返すといっても五年に一度ではチト早すぎはしまいか、ハレー彗星ですら六十年に一回なのにと恨んだところで如何と

もし難く、「もはや命運は決し、万一の事態を覚悟せねば」と思った矢先、突然バスの後部座席より声が上がった。

「運転手さん、止めてくれないか、トイレにいきたいんだ」

振り返ればくだんの軒のおじさんが、退屈の故か、はたまた緊張の故か鼻毛を引っ張りながらアピールしている。

「あの人は体外に出せるものは何でも出したいタイプなんだな？」とNは一人合点しつつ運転手の反応はとみれば、彼はひたすら前車との距離を詰める振りをしておじさんの声を完全に無視する構えである。

女性客の一部には暗黙裡におじさんに同調する気配もあつたが、バスを止めるところで、車がギッシリ詰まった道路の真ん中でどうすればいいのだろう。

自動車専用道路からやっと視界が開け右手前方に成田空港ビルの全容が見渡せる位置に到達した途端、バスの乗客、乗員は眼前の光景に接して愕然とし、呆然とした。

見よ！ 行く手にはありとあらゆるタイプの車が三列縦隊でせめぎ合い凌ぎあい、渋滞は南ウイングから北ウイングへ、北ウイングから空港出口へと果てしなく、限りなく連なっているではないか！ 一般道路はとみれば東西南北の各方向とも重ね合わさんばかりの押し合い、ひしめき合いである。交差点の信号は真面目に点滅を繰り返しているが顧みる車は皆無。

交通警官が笛を吹いても完全に無視。混乱と混沌の混合体は誰も無口のまま一センチの空隙も逃さじとパントマイムの鏝迫り合い。空港の駐車場は侵入路も退出路も車で溢れ、差すも引くもどうにもならないのだ。とにかく見渡す限り何百台の車がその何倍かの人間を載せたまま、化石のように押し黙り、まるで金縛りにあつたように動けないのだ。これが経済大国日本の表玄関、成田国際空港の現実なのか？

たまりかねたようにどこかの航空会社の制服を着たキャビンアテンダントが数名タクシーから降りて空港に向かって走りだした。気が付くとその前の車でも人が降りて車のトランクから手荷物を出している。後ろのバスからも何人かの乗客が降りてきている。南ウイングまでもう一キロはないだろう。時計はすでに五時を二、三分まわっている。Nの乗る飛行機のテイクオフまであと二十分しか残っていない。空港についても入口から搭乗ゲートまでどんなに急いで

も五分はかかるだろう。あと十五分でこのバスは空港に辿りつけるだろうか？
「一台のバスから乗客を降ろし荷物を車体の下から出すのに少なくとも五分はかかる。我々のバスの前にはざっと十台のバスがいるし、それ以外に数十台のタクシー、ハイヤーや乗用車もいる。このままでは絶対に間に合わない」とNは素早く計算した。

今だ、この時しかチャンスはない。Nはスクツと座席から立ち上がった。驚く隣の女性を尻目に手早く荷物を網棚から降ろした。幸い今回に限って二個の軽い荷物しかなかった。

Nは運転手に「時間がないから降ろしてくれ」と頼んだ。彼は申し訳なきように「規則で高速道路では乗客は降ろせません」という。車が走れないのは高速道路とは言わないんだとか屁理屈をこねている場合ではない。

「とにかく降りるよ」と宣言してNは両手に荷物をぶら下げて早足で歩きだした。報道関係とおぼしきジャンパーが高速道路のフェンスに跨って混雑ぶりをビデオに収めていた。幸い雨は止んでいたが変になま暖かい風が吹いていた。間に合うかな？ 魔に会うのかな？

空港に近づくとも周りの人たちが走り始めた。つられてNも荷物と腹をゆすりながら走り出していた。走るにつれて頭髮のなかに汗が滲み出てくるのが判った。五時十分に南ウイングに着いた。飛行機の離陸時間までまだ十五分ある。空港内は思いのほか空いていた。

「みんな時間通り来れないのかなあ？ でも、俺はなんとか間に合ったぞ」
Nは内心安堵した。

二千円の空港施設利用税の自動切符売り場で団体さんがもたついている。「どづいたるか、早よせんかい。千円札のしわぐらいチャント伸ばしときいな」
Nは一分でも惜しいのだ。

Nはゲートナンバーを確認するため出発便のボードをチェックした。

「あれ？ 出発時間は五時十分になっている！ なんで？」Nは自分の頭に血のぼり血圧が上がってゆくのが手にとるように判った。我にも似ず狼狽してふるえる手でチケットを確認する。チケットにはチャント五時二十五分発と書いてある。Nは動く歩道の上を少なくなった髪を振り乱して全力で走った。

ここまで来て乗り遅れたらそれこそ社内誌の絶好のお笑い記事になってしまう。他人の荷物に蹴躓いて転びそうになる。左のふくらはぎが吊りそうになる。汗で眼鏡がずり落ちる。

汗まみれのNが不安におののきながら出発ゲートに着いたのは五時二十一分だった。ゲートにも出発時間は五時十分と表示されていた。でもわがUA882便はまだ飛んでいなかった。箱崎でチェックインした客を待っていたのだ。ふたつある搭乗口のうち、エコノミーサイドのドアは既に閉じられていた。

「出発が遅れているのですか？」と背の高いキャビンアテンダントに聞いた。

「いえ、箱崎からのお客様をお待ちしていました。貴方様はどうやって成田まで来られましたか？」

「リムジンでここまで。途中から歩いて、いや走って……」

「大変でございました。もうゆっくりなさってください」

Nは機内のシートに転がり込んだ。またひとしきりの汗、汗。おしぼりを二枚もらう。あとはアルコールを飲んで寝るだけ。本当にご苦労様。Nの後から五、六人の乗客を収容してUA882便は何事もなかったようにシカゴ目指して離陸したのだった。

この気まぐれな台風十五号は、その後進路を東方に変え直接本土に上陸はしなかったものの、翌日せつかく復旧したJR成田線や外房線を再びダウンさせ、国内航空便約五十便、国際便六便を欠航させた由。

Nは後日ニューヨーク事務所での日本語新聞で知った。

それから丁度一週間後、帰国便を待つサンフランシスコの空港で、Nは台風十七号が九州目指して進撃中との情報を耳にした。エルニーニョに刺激されて今年の台風は多産系、現在二十六号を打ってホームラン王を狙っている落合と同じく三十号までゆくか、などと仕事を終わって帰国便を待つ間Nはくだらないことを考えていた。と、突然、待合室のスピーカーが誰にもなく呼びかける。

「台風十七号の関係で急に日本に帰らなければならぬお客様がいらっしゃいます。皆様の中で帰国を明日に延ばしてもよろしい方がいらしたら至急搭乗カウンターまでお申し出ください。」

その方には明日の便の予約と今晚のホテル代、夕食代、日本までの電話代その他、四百ドルの現金並びに五百ドル相当の旅行クーポンを差し上げます」

この放送を聞いた待合ロビーが急にざわつく。

今回も「俺、今日帰っても何もすることはないんだ。金貰ってもう一日アメリカにいられるなら応募してみるかな」と時間に余裕のあるラッキーな若者が濡れ手に粟のこの話に早速検討を始めていた。

以前にもオーバーブッキングがあつて一つのシートに三人の予約が入っていたことがあつて、航空会社は、これは会社の責任だからと、三人の予約客に向かつて八十ドルから補償金をセリにかけ、結局二百ドルで二人の学生が次の便に乗り換えたことがあつた。

それにしても台風だ、火山の噴火だ、とか地球はこのところ忙しくなってきたが、天災に遭う、遭わないは時の運、人生まさに出たとこ勝負だ。『人間の価値を高めるのは、諦めずになんとか現状を打開しようとする前向きの姿勢と、どんな時にも客観的に状況を観察し対応策を考える冷静な判断力、そして周囲の人を巻き込んで突進する実行力である』と何かの本に書いてあったことをNは思い出した。

(8450字)